

# 特殊な粉 電池に航空機に

## 杉山重工社長に聞く

「何でも粉にする会社」だと聞いて訪れた瀬戸市六田町の「杉山重工」。杉山大介社長(まじ)が「鉱石などの原料を入れると、特殊な機能を持つ粉になって出てくる。そんな設備、プラントを造っています」と説明してくれた。この粉体生成技術は航空機部品や電子機器など、幅広い分野の進化を可能にしていた。

(長坂幸枝)

「特殊な機能を持つ粉」を造るプラントとは？

例えば、航空機の部品に使われるチタンや、ネオジウム磁石、リチウムイオン電池のもととなる粉などを生産する設備を手掛けている。磁石はパソコンのハードディスクを動かすモーターに、電池は電気自動車に組み込まれている。いずれも精密な部品の材料となるわけだからそれを作る機械

自体にも高い精度が求められる。付加価値の高い粉体を生産するのが、わが社が造るプラントだ。どんな加工が可能なの

# 経済GO!



③焼成された粉末材料を冷やす装置。中のパイプを粉末が通る。工場は昨年、写真右側のスペースを増設した。④携帯電話のこんな部分の材料を作るプラントも手掛けてきた。⑤色や形もさまざまな原料。いずれも瀬戸市六田町の本社工場で

## 企業秘密詰まった一品一様のプラント造り

リチウムイオン電池でいえば、リチウムやコバルトなどの原料を均一に混合して炉で焼成し、酸化させる。ただしわずかでも金属が入り込むと電池の特性が無効になってしまうため、装置にはセラミックを用い、一連の工程を全自動で対応する設備を納入した。依頼主の会社に合わせ、設計段階から技術提案している、一品一様のプラントを造っている。

「新型コロナウイルスの流行による経営への影響は今のところ、ない。電気自動車などの新技術の開発は、脱炭素社会に向けて計画が決まっています、速度がゆるむことはなかったからだと思います。ただ、展示会への出展や、訪問営業の機会が減った。当社で造っているプラントは、顧客の企業秘密が詰まった心臓部であることが多いので、顧

客の同業他社には売れない。なので売り上げを伸ばすには、常に新しい業種で技術を磨かねばならない。新しい技術を磨くのに大切なことは、

若し社員には「手を汚して勉強しよう」と伝えていく。現場で問題解決に取り組むだけでなく、専門書から知識も得なければ職人の域を出ない。経理、総務部門も同じで、コロナ禍でBCP(事業継続計画)を見直した。ネットで結び、クラウド化を実現。営業や工場での製品テストにも、オンラインを取り入れた。

「瀬戸の街に望むことはテスト時には依頼主の企業の社員が訪れるが、宿泊施設が少ない。ホテルと駐車場を整備して工業団地、シブパルクなどの観光地を結び、シャトルバスを走らせハブ(交通の拠点化)を進められないか。自転車で巡るのにちょうどいい街だ。人を呼び込むことができれば、伝統的な陶磁器産業の底上げもできると思う。」

杉山重工 1959年、春日井市で創業。当時は窯業用粘土生成に必要な機械などを製造していた。1970年代、音楽用磁気テープの磁石の材料を生産する装置づくりから高付加価値の粉体生産に移行。67年瀬戸市に移転、2004年現在の企業団地に本社工場新設。05年現社長就任。海外15カ国に納入実績あり。社員64人、年間売り上げ27億円。



各社の心臓部の装置を造ることが多い中、「自社の魅力をどのようにPRするかがかぎ」と語る杉山社長